

遺跡発表1. 佐倉市

よしみいなりやま 吉見稻荷山遺跡

—土器片錘が語る縄文時代の漁労活動—

主任調査研究員 小倉和重

遺跡の立地

遺跡は、東西をそれぞれ印旛沼に注ぐ鹿島川と手繰川に挟まれた標高約26mの台地上に立地している。台地は両河川から樹枝状に入り込む谷によって複雑に侵食されているものの、平坦な地形が馬の背状に南北に長く続いている。遺跡は台地の中央、鹿島川から入り込む谷寄りに展開しており、一方の手繰川とは直線距離にして500mの位置にある。手繰川のある水田面と遺跡との比高差は約20mである。

調査の概要

ガソリンスタンドの建設に伴い、平成15年3月3日～3月14日に対象面積3,636㎡について576㎡の確認調査（第7次）を実施し、その後、平成16年8月2日～10月8日に885.75㎡について本調査（第8次）を実施した。

検出された遺構は、調査終了時の所見では縄文時代早期（約7,000年前）の炉穴4基、中期（約4,500年前）の竪穴住居跡10軒、小竪穴40基、土坑43基などであるが、重複が著しいため今後の整理作業によって遺構数は変わるとみられる。出土した遺物は中期（加曾利EⅠ～EⅡ式）の土器を中心に、早期後半の貝殻条痕文土器などが少量含まれている。その他、耳飾や各種石器も出土しているが、なかでも漆容器（土器）が土坑内から他の土器と入れ子状になって出土したことが注目される。

調査の成果

これまでの調査では多くの成果が得られているが、ここでは「土器片錘」（一般に、魚を捕るための網につけられたおもりと言われ、土器片の両端に紐を掛ける切り込みがあるもの）に焦点をあてることにしたい。第5次（平成13年11月）と第7次・第

8次調査分を含めた土器片錘の総数は、793点に及ぶ。とくに、第5次調査において住居跡の床面から292点もの大量の土器片錘がまとまって出土したことは全国的にも例がない。土器片錘が盛んに作られたのは加曾利EⅡ式期であり、重量は15g～30gにおさまるものが全体の約7割を占める。遺跡の立地から考えると、遺跡西側を流れる手繰川、さらには現在の印旛沼において盛んに漁労（網漁）活動を展開していたことが推測できる。そういう意味では、本遺跡の性格を「漁師ムラ」というような側面で捉えることもできるのではないだろうか。しかし、当該時期の貝塚が付近に存在しないことから、捕獲対象とした魚種については推測の域をでない。

今後の課題

今回は、「土器片錘」という漁労用具に焦点をあてて当時の漁労活動について考えてみたが、本遺跡だけの単独の活動ではなく、この地域における同時期の遺跡との係わり合いという観点から考える必要もある。本遺跡から手繰川に沿って1km北に位置する生谷松山遺跡おぶかいまつやまでも土器片錘が多く出土していることから、漁労活動を含むその他の生業分野も視野に入れながら両遺跡間の関係を考えていく必要があるだろう。無論、そこには集落の安定した生活を維持する装置として、近隣集落との親和的（社会）関係が前提として確立されていなければならないと考える。

今後は、周辺遺跡との関係について遺構・遺物の両面からアプローチしていく必要がある。また、生業活動については、遺跡を取り巻く自然環境の違いによって地域差があることは言うまでもないが、その具体的な内容について「土器片錘」がどこまで語ることができるのか、今後の課題としておきたい。

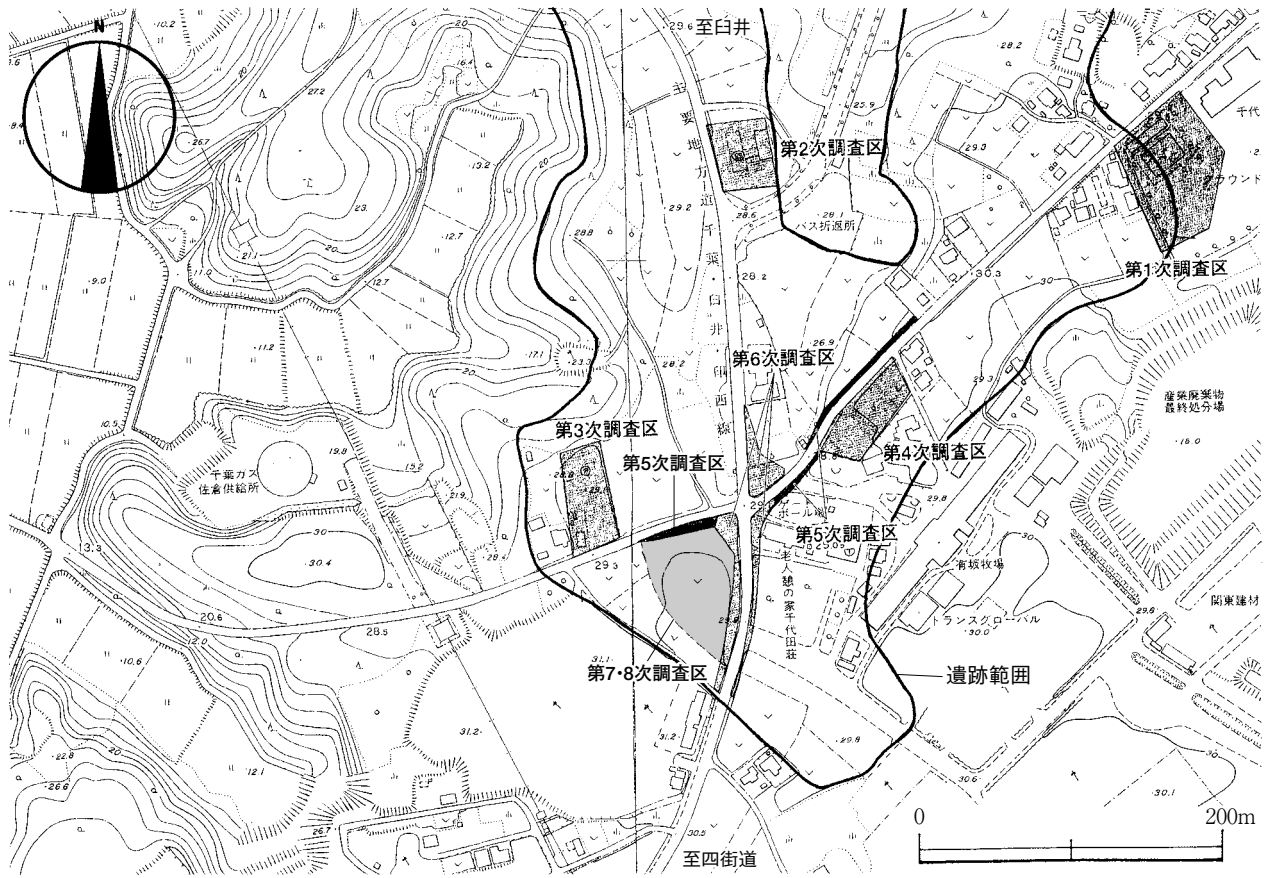


図1 吉見稲荷山遺跡位置図及び調査箇所

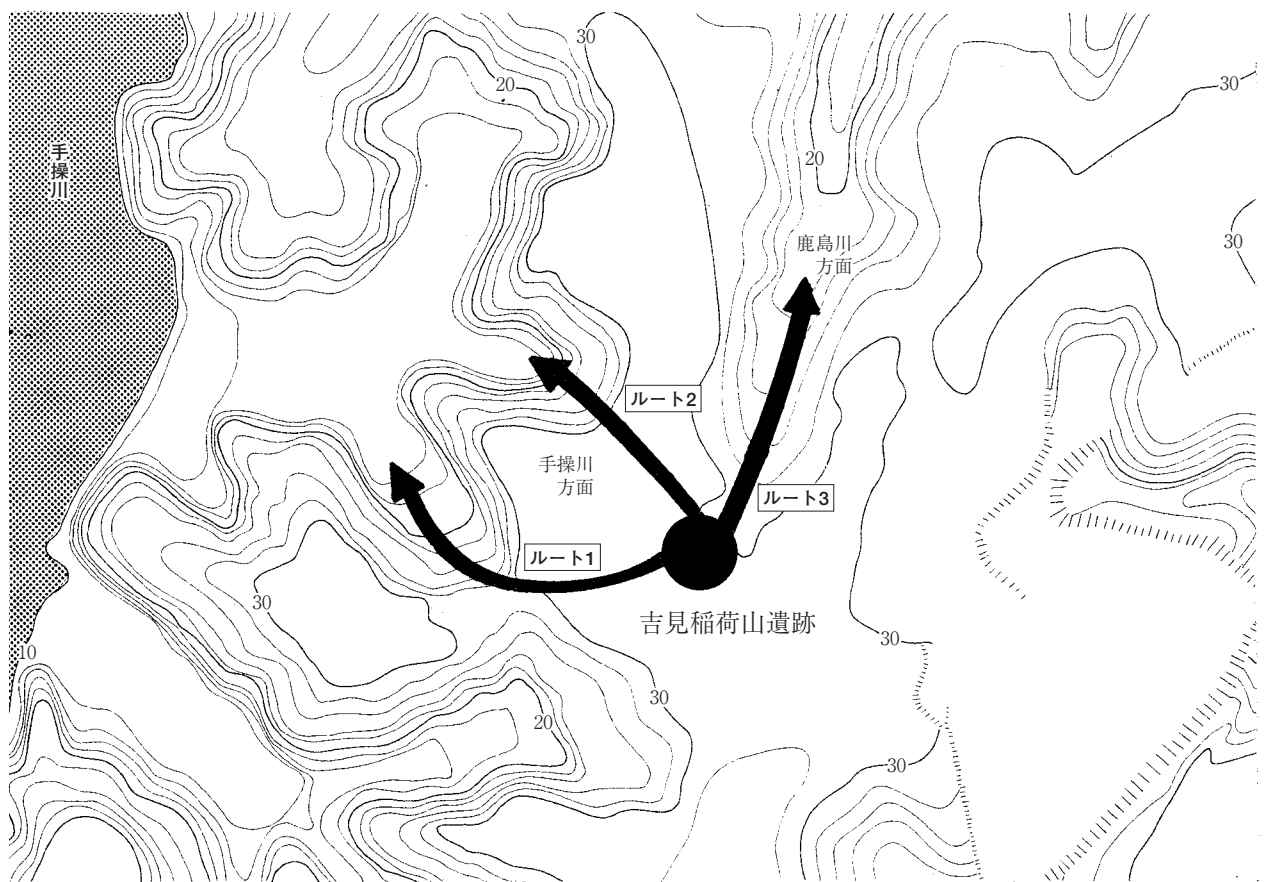


図2 吉見稲荷山遺跡周辺地形図（縮尺・範囲は図1に同じ）

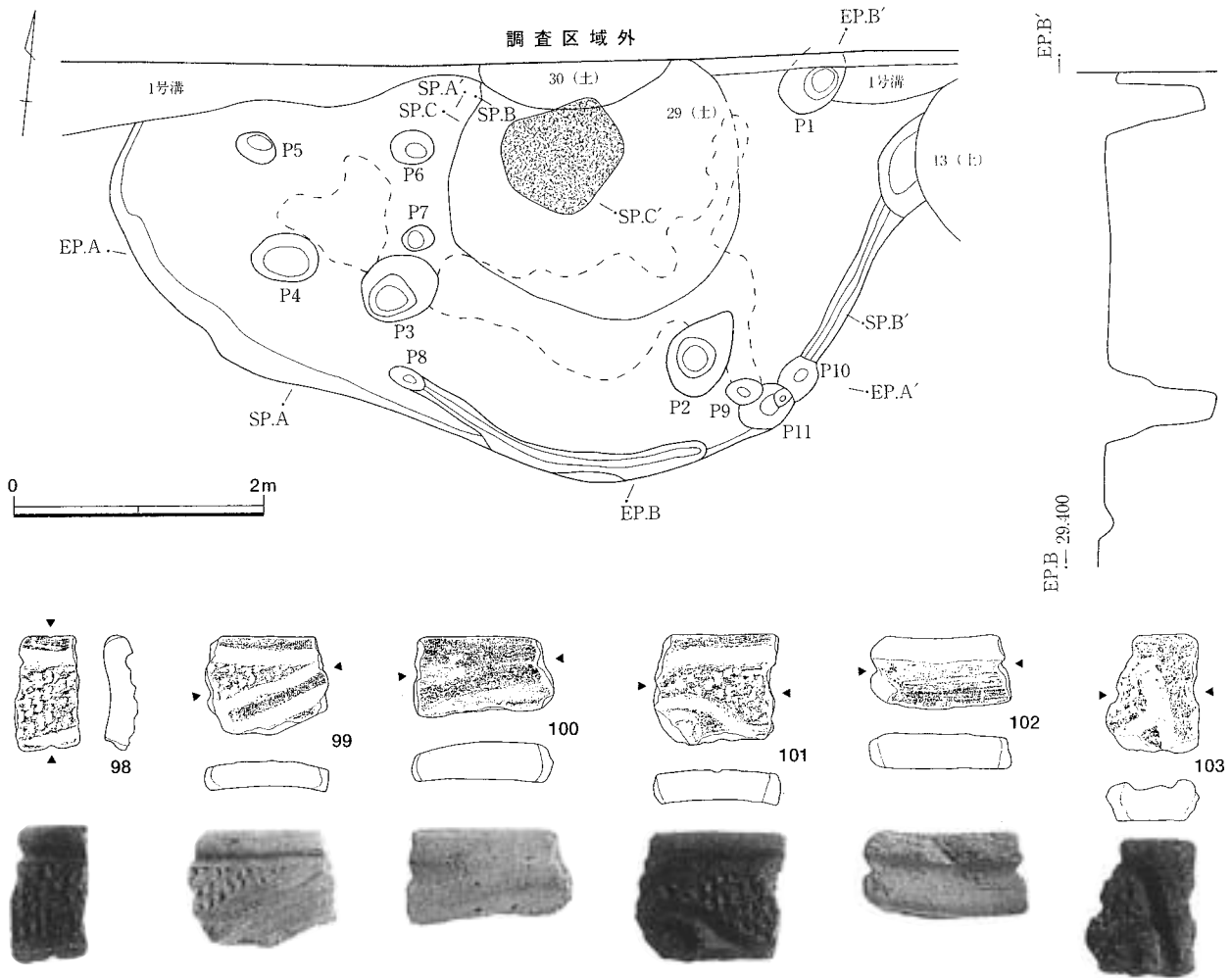


図3 1号住居跡と出土した土器片錘の一部

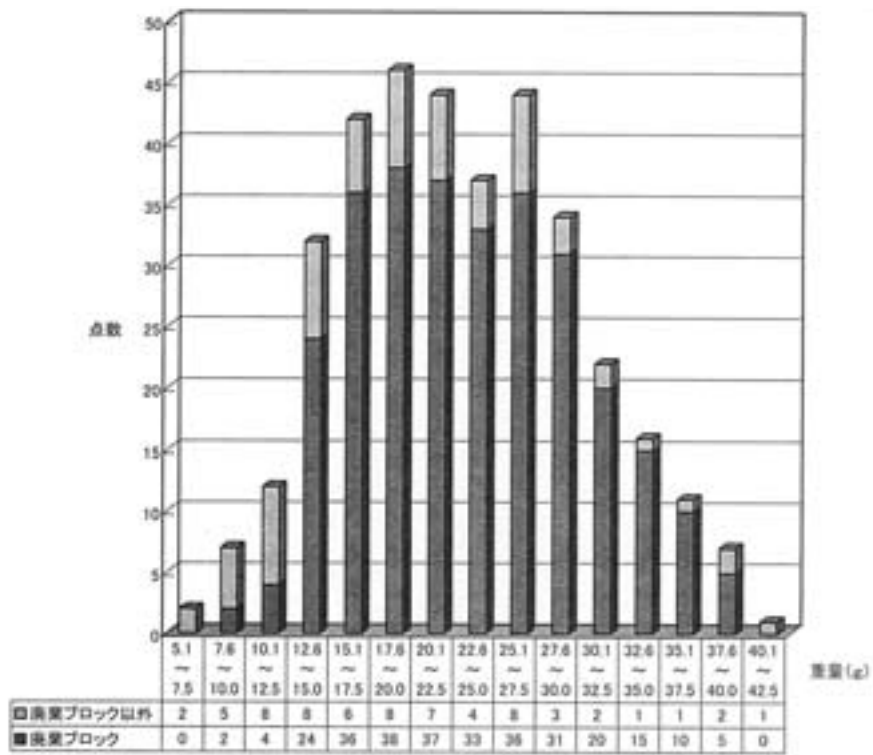
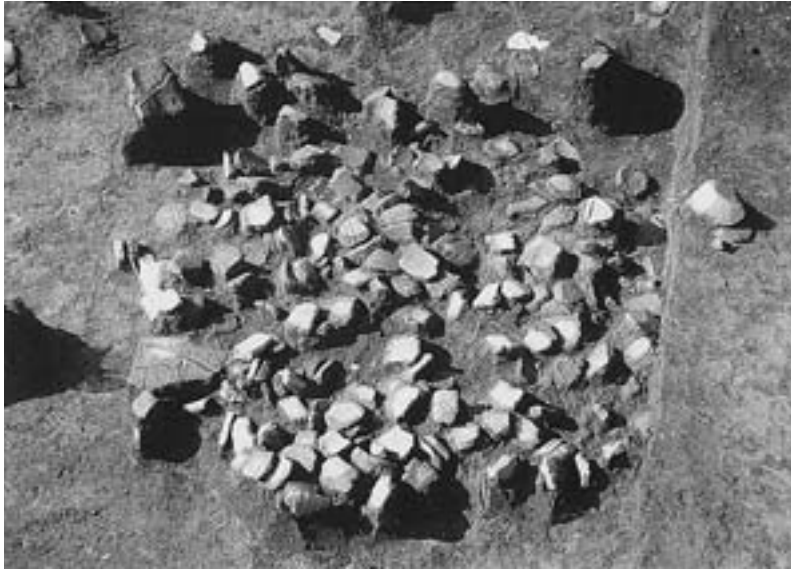


図4 1号住居跡出土土器片錘重量分布図

※図3・図4ともに第5次調査の報告書より転載



土器片錘は炉の南東の床面に径約60cm、厚さ15cmほどに堆積していた。1軒の住居から出土した数としては全国的にも最多であろう。果たしてこの家の住人だけで使用するものだったのだろうか。側面が磨耗したものや切り込みがない未製品も混ざっていた。なぜ、製品と未製品が混ざって残されることになったのか。さまざまな疑問を投げかけるとともに、縄文社会の謎にまた一歩近づける材料を提供してくれた。

写真1 1号住居跡土器片錘出土状況

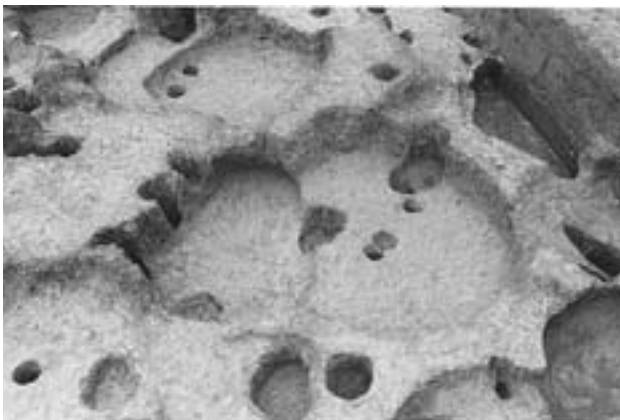


写真2 重複する土坑群

径2m前後、深さ1m前後のドングリ類の貯蔵に利用された穴で、しばしば壁面がオーバーハングする。底面には柱穴状の小穴がある。



写真3 有段住居跡

2段の掘り込みをもつ住居で、縄文時代中期の特定の時期にみられる。一段低い床面に硬化面が認められることが多く、炉がないことも多い。



写真4 漆容器出土状況(右上：拡大)



②上の土器：高さ5.5cm、径8.5cm
下の土器：高さ9cm、口径9cm、底径4.5cm

①土坑の半ばほどから、小型の深鉢2個が入れ子状になって直立した状態で出土した。下の土器が漆容器で、それにぴったり合うように上の土器で蓋をしている。

〈関連文献〉

小倉和重 2002 『吉見稲荷山遺跡(第5次)』 (財)印旛郡市文化財センター

2003 『佐倉市吉見稲荷山遺跡の研究—土器片錘大量出土の住居跡をめぐる—』 『佐倉市史研究』第16号 佐倉市